

**わがまち・ふるさと再発見!**  
 「流山のむかしを訪ねて」  
**13 奈良・平安時代の製鉄所**

案内役 田村哲三



弥生時代、北九州から始まった鉄生産は、7世紀後半には東北南部まで到達したとされ、流山市内でも製鉄炉が発見されています。

鉄は、製鉄炉で原材料の鉄鉱石や砂鉄などを燃料の木炭で溶かし、生産しました。炉内の温度を高温にするために踏みフイゴで送風。溶かし終わると炉を壊し、不純物を除外して残った鉄塊を取り出します。

その後、精錬、鍛造、鑄造などを経て鉄が完成。壊した炉は再利用して複数回使用しました。



富士台製鉄炉

鉄は武器や農機具として利用され、人びとの生活に大きな変化をもたらした。流山市内では東深井中ノ坪と富士見台から製鉄炉や精錬炉が発見されています。東深井中ノ坪第1遺跡は標高12〜13mの台地上で、8世紀前



東深井中ノ坪 製鉄炉  
 (博物館展示写真)

半の遺跡。住居跡10軒の中から多量の鉄塊が出土しました。また、近くの斜面にあった中ノ坪第2遺跡からは8世紀前半の製鉄炉が見つかっています。製鉄炉は4回補修の跡があることから5回使用されたと考えられます。なお、燃料の木炭はクヌギと分析されています。

富士見台第2遺跡からは8世紀前半の製鉄炉が発見されました。炉は補修跡から5回操業されたようです。住居跡も8軒、燃料の木炭を生産する炭窯も7基発見され、炭の原料はクヌギでした。

中ノ坪遺跡と富士見台遺跡には年代や製鉄炉、住居跡、炭など類似点が多く、両遺跡とも、その後の集落跡が認められないことから、短期的に利用されたものと思われる。では何のために流山市の北部に製鉄炉が作られたのでしょうか。考えられることは、

中央政権が東北経営に力を入れていた時代、常陸や下総は兵や兵器、物資の補給の役目を担っていました。それらの1つが鉄で、中央から派遣された製鉄技術集団が適所で製鉄し、資源が尽きると次に移動する、そのような過程の製鉄所であったと思われる。

昭和55年当時、東深井中ノ坪で発見された製鉄炉は、関東で最も古い製鉄炉とされ、現在、流山市の博物館に展示されています。

出典・ふるさと流山のあゆみ

**わがまち・ふるさと再発見!**  
 「流山のむかしを訪ねて」  
**14 奈良・平安時代の**

神社仏閣1  
 案内役 田村哲三



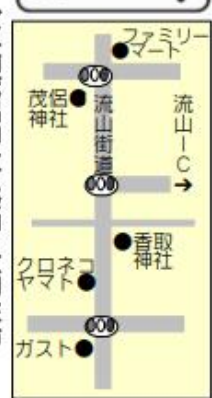
古代の創建とされている神社は、社伝や寺伝、縁起などがもともとなっていない。以下それらをもとに紹介します。

◆香取神社(北小屋) 祭神・経津主命  
 境内には香取神社の碑があり、碑文には創建からの経緯が書かれています。



「本社の創建は古く、日本武尊東征のころに鎮座していたと伝わるが証拠はなく、伝説や記録によれば神護景雲3年(769)、経津主命相殿に豊玉姫命を祀り桐斎殿と称した。のち桐明神と改称した。さらに文政5年(1822)、香取大神宮と称し桐ヶ谷7か村の鎮守としたが、明治4年、神仏分離で香取神社と改称し、郷社に列せられた。戦後は郷社の社格はなくなり香取神社となる」。

また「古来より武将の信仰が厚く、再起を図った源頼朝が、鎌倉入りを前に家臣安達盛長を使者にたて祈願させた。さらに奥州征伐の際も盛長に戦勝祈願させ、文治5年(1189)10月にはお礼として社殿を造営寄進した。永禄年間には小金城主高城胤吉も社額を献じた」とあります。



◆三輪茂侶神社 祭神・大物主命  
 言い伝えでは「下毛野君の一族が関東一円に広がり、その一部の人がこの地に来た。そこで見た丘陵一帯の姿が、大和の三輪山に似ていたので三輪の山と呼んでそこに住むようになった」というもの。

また『東葛飾郡誌』には「貞観2年(860)に勅使が下向したとき、大物主命が三輪山に鎮座することから村名を三輪野山と名付けた。そこから三輪神社としたが、三輪山の別称の御踏山にちなんで茂侶神社と変更したい、と申し出た」とあります。



寛保元年の村絵図には三輪大明神とあるので、名称も一定ではなかったようです。一方、標石には式内社とあります。延長5年(927)完成の延喜式には次のように記されています。

「下総国十一座大一座小十座(中略)葛飾郡二座並小茂侶神社意比神社」とあり、茂侶神社が式内社であることがわかります。ただ、流山市以外にも茂侶神社があり、現在のところ特定されていません。

同神社では毎年1月に、市指定無形民俗文化財の「チンガラ餅行事」が行われます。

(身近な史跡めぐり 9号、52号参照)

わがまち・ふるさと再発見!  
 流山のむかしを訪ねて  
 奈良・平安時代の  
 神社仏閣②  
 業内後 田村哲三



前号に引き続き、古代創建された  
 神社の紹介をします。

①諏訪神社



社伝による  
 と創建は大同  
 2年(807)  
 とされていま  
 す。祭神は武  
 御名方命(た  
 けみなかたの  
 みこと)です  
 が、古くから

諏訪大明神とも呼ばれ「天武天皇の第  
 一皇子の高市皇子の後裔が、都の政  
 変を逃れ、関東に下る時、信州の諏  
 訪大社に立ち寄り扁額をいただいた。  
 初め風早に住み、次に住んだところ  
 を借りの都と偲び、名都借りと呼ん  
 だ。その後、駒木に定住して諏訪大  
 社の扁額を氏神として祀り、諏訪神  
 社とした」というものです。また、源  
 頼朝が社僧を召し出し法薬を奉げた、  
 戦国武将の高城氏と千葉氏が参拝し  
 た、徳川光圀が数度にわたり奉幣し  
 たなど、古くから武将等が参拝した  
 ことが伝わっています。

社は本殿、幣殿、拝殿からなる荘  
 厳な建築で、市の有形文化財に指定  
 され、長い参道と樹木が鬱蒼と茂る  
 境内には、源義家鞍掛之松の碑、与  
 謝野蕪村の句碑、山上憶良の歌碑、  
 北村西望作・源義家鞍馬のプロンス像  
 各種神社など見どころ満載です。

②成願寺

山号・通法山。

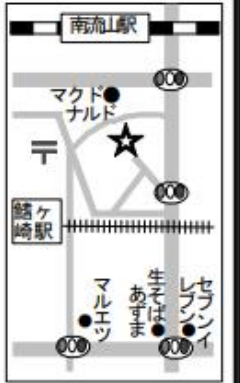
本尊は釈迦牟  
 尼仏(しゃかむ  
 にぶつ)、日蓮  
 宗の寺院。創  
 建は建治2年  
 (1276)と



していますが、前身の真言宗の寺院、  
 金胎山道場寺は大同年間(806)8  
 10)の創建と伝わります。成願寺の  
 特徴は一つの堂宇に仏と神が同居す  
 る神仏習合の寺院です。神仏習合は  
 明治期の神仏分離令で消滅しました  
 が、当寺は奇跡的に残りその姿を今  
 に伝えています。

成願寺に伝わる『鞍掛大竜王縁起』  
 によると大同年間、近くの沼に住む  
 大竜が嵐を起こし村人を困らせてい  
 た。弘法大師の高弟・桂伝阿闍梨(け  
 いでんあじり)は秘法をもって竜  
 を降伏させ、風早明神として祀り金  
 胎山道成寺を建立した。建治年間、  
 日蓮聖人の高弟・日郎上人は道場寺  
 の僧と法論を戦わせ勝利した。村人  
 は一村あげて日蓮宗に改宗、竜王を  
 南無諏訪大明神と改め現在地に移し  
 成願寺とした。堂宇は駒木の高市氏  
 が建立したというもの。他にもいく  
 つかの言い伝えがありますが、いず  
 れも真言宗から日蓮宗に変わった経  
 緯を伝えています。  
 (身近な史跡めぐり59号、60号参照)

わがまち・ふるさと再発見!  
 流山のむかしを訪ねて  
 奈良・平安時代の  
 神社仏閣③  
 業内後 田村哲三



東福寺には天曆5年(951)に書  
 かれたとされる『守龍山東福寺縁起』  
 があり、次のようなことが書かれて  
 います。



「弘仁5年(814)、弘法大師42歳  
 のときこの地に来て、小高い丘の上  
 に立った。そこには五色に輝く池が  
 あった。すると、池に住む竜王が翁  
 の姿になって現れ大師に『ここは東  
 方の福田であるから、薬師如来が常  
 在する土地である。瑠璃光仏(薬師如  
 来)を彫ってご本尊とし、寺を建て永  
 くこの地を守ってほしい。そして、  
 寺の名を守龍山東福寺とするように』  
 といった。大師が瑠璃光仏を彫る御  
 衣木を探していたところ、突然龍が  
 現れ霊仏を捧げた。大師は霊仏を補  
 修して薬師如来を刻み本尊とした。  
 龍が去るとき背鱗の先を少し残して  
 いたのでこの地を鱗ヶ崎と呼ぶよ  
 うになった」

縁起が鱗ヶ崎伝説として語り継が  
 れ、縁起から東福寺の創建は814  
 年としています。また、縁起には、  
 藤原秀郷のことも書かれています。  
 「平将門が東国に乱を起こしたと

き、藤原秀郷が東福寺で祈願する  
 と、その夜の夢に高僧が現れ『敵軍  
 の敗北』を告げた。秀郷が身を清め  
 て祈願すること27日目、天慶3年  
 (940)2月14日午の刻と思われ  
 る頃、宝殿の扉が自ら開いて白羽の  
 矢が東に向かって飛び出し、雷鳴が  
 響くようであった。この日、秀郷は  
 将門を滅ぼした。この勝利の報に喜  
 ばれた天皇は役人に命じて金堂を修  
 理し、荘田500石を寄進した」と  
 いうものです。

関東で乱を起こした将門は天慶2  
 年(939)、新皇と称して威を振るっ  
 たが、翌年、藤原秀郷、平貞盛らと  
 戦い敗死しています。  
 東福寺には他に、鴨伝説や中門建  
 立伝説があります。

身近な史跡めぐり75、76を参照



あまほ  
 中門は左  
 中央の鴨  
 境内に居  
 る「鴨居  
 郎」とい  
 われてい  
 る



市内で最も古い寛  
 文元年の延命地藏

# わがまち・ふるさと再発見!

## 「流山のむかしを訪ねて」

### ⑬ 鎌倉時代の流山1 矢木郷と矢木式部太夫胤家

案内役 田村哲三



平安時代末期になると平清盛が京都に武家政権を樹立。武家政権の始まりです。

文治元年(1185)、清盛が病死すると、東国で支配を強めていた源頼朝が平家を滅し、鎌倉幕府を樹立しました。鎌倉幕府は約150年続きました。

幕府を支えたのは下総の千葉常胤(ちばつねたね)をはじめ、関東の有力御家人たちでした。

千葉常胤は平氏の出で、現在の千葉市を拠点に下総一帯に一族を配置して支配地を広げました。

流山市周辺では、当時、矢木郷と呼ばれた思井や芝崎、古間木一帯を矢木氏が支配しました。矢木氏は常胤の次男の相馬氏から分かれた一族です。また、名都借あたりから松戸市周辺にかけては風早郷と呼ばれ、千葉一族の東氏から出た風早氏が支配しました。

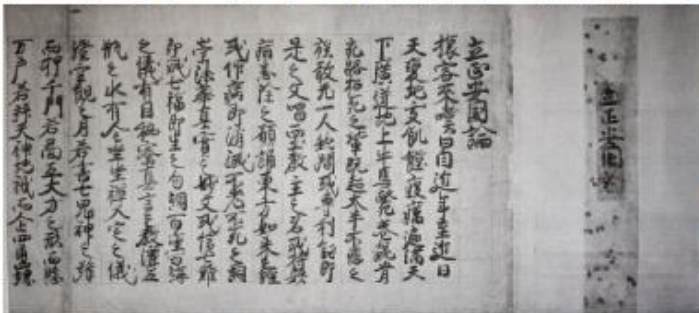
矢木氏について触れてみますと、2代目の矢木式部太夫胤家(やぎしきぶたゆうたねいゑ)は地頭として矢木郷を支配しながら、鎌倉幕府においても重要な役についていました。

『吾妻鑑』によれば宝治2年(1248)の正月行事に「五位の供奉人」として將軍の供をしたとあります。また「香取神宮文書」には神宮の西廻廊一字の造営分として、70石を矢木郷の胤家が納めたとあることから、矢木郷の地頭としても支配力を強めていたと考えられます。さらに、胤家は日蓮宗の開祖日蓮から、日蓮の直筆著『立正安国論』を日蓮から直接授かったとされています。その後『立正安国論』は幾人かを経て、

法華経寺(市川市)へ納められ、同書は現在国宝となっています。以上のような事柄から、地頭職以上の実力者であったようです。

では胤家の館はどこにあったのか、ということ、思井の堀ノ内遺跡ではないかと推定されています。同遺跡からは居館跡と思われる遺構や、近くの方形周溝区画墓から中国製の磁器や和鏡などが出土。これらは13世紀前半のもと考えられることから胤家の時代と重なります。

矢木家のその後は全く不明ですが、戦国時代の戦乱が影響したのかもしれません。室町時代の本土寺過去帳にある「ヤギノ城」が同遺跡と同じとすれば、ここで戦いがあったことがわかります。資料「立正安国論」を指定文化財・法華経寺蔵



# わがまち・ふるさと再発見!

## 「流山のむかしを訪ねて」

### ⑭ 鎌倉時代の流山2 板碑文化

案内役 田村哲三



堂観音方

市内には鎌倉時代を知る史料がほとんどないのですが、その中で手掛かりとなるのが、鎌倉時代から戦国時代にかけて作られた板碑です。板碑文化は鎌倉時代に始まり戦国時代末には廃れてしまいましたが、板碑の変遷を見ることで、この時代の民間信仰を知ることが出来ます。

板碑は板石塔婆とも言い、石(主に緑泥片岩)でできた卒塔婆のことです。市内では銘文などが確認できない破片のままで含めると約500基が検出され、検出場所は低地部に接する台地部で、古くから人々が住んでいたとされる村落です。全体の約40%が西深井から出ており、当時多くの人が住んでいたと考えられます。市内で最も古いとされるのが狼家墓地(平方観音堂裏)にある阿弥陀一尊板碑で、弘安10年(1287)の銘があります。西深井安藤家墓地にある阿弥陀三尊板碑2基は、正和4年(1315)と元亨2年(1322)で、千葉県の有形文化財に指定されています。



阿弥陀三尊板碑

す梵字)が刻まれています。多くは阿弥陀如来一尊や阿弥陀三尊ですが、初七日から33回忌に至る各忌の守尊を表す13仏や山王信仰の守尊の21仏、法華経の題目を刻んだものもあります。また、種子の下には蓮華座も刻まれています。では板碑はなぜ建てられたのでしょうか。現在、私たちは亡くなった方や祖先の供養のためにお墓に卒塔婆を建てます。それと同じで亡くなった方の追善供養として建てられました。当時は墓石を建てる習慣がなかったため、墓石替わりでもあったようです。

室町時代も中頃になると身近に合戦なども起こり、板碑の建立も逆修供養(生前供養)に変わっていきます。村人が集まって行う一結逆修供養や念仏信仰者の一結、月待信仰者の一結など衆団による逆修供養としても建てられました。月待衆による板碑の種子は月輪を表す〇で囲まれ、山王信仰による21仏板碑には庚申の文字があります。

戦国時代には庚申信仰が流山市域に伝播していたことがわかります。



阿弥陀一尊板碑

板碑には種子(しゅじ)。仏を表

